



# 第72回日本皮膚科学会中部支部学術大会 ランチョンセミナー1

## 患者さんに合わせた 適切な治療を考える



座長 | 多田 弥生 先生 帝京大学医学部皮膚科学講座 主任教授  
飯塚 一 先生 医療法人社団 廣仁会 札幌乾癬研究所 所長

### 免疫原性からみた乾癬に対する生物学的製剤の選択

演者 | 吉崎 歩 先生 東京大学大学院医学系研究科 皮膚科学 講師 乾癬センター長

### 薬剤の特性からみた乾癬診療 ～北海道における治療連携を考える～

演者 | 本間 大 先生 旭川医科大学 国際医療支援センター 教授

2021年11/20(土) 11:50-12:50

A会場 奈良県コンベンションセンター 1F コンベンションホールA

LIVE配信も行いますので、WEBよりご視聴いただけます。  
詳細は大会HP (<https://cjda72.jp/>) をご覧ください。

# 第72回日本皮膚科学会中部支部学術大会 ランチョンセミナー1

## 免疫原性からみた乾癬に対する生物学的製剤の選択

吉崎 歩

東京大学大学院医学系研究科 皮膚科学 講師 乾癬センター長

乾癬は特徴的な皮疹を呈し、日常臨床においても比較的好く遭遇する疾患である。ともすれば、皮膚だけの疾患とも思われがちであるが、乾癬は全身性の炎症を背景に有するため、関節炎をはじめ、代謝性疾患、真血管系疾患、眼疾患などを合併し、ときに患者の生命予後にまで大きな影響を及ぼす。従って、乾癬診療では全身性の炎症を抑え込む治療が重要であり、事実、生物学的製剤の登場は顕著な有効性をもたらしている。生物学的製剤の開発は盛んに行われ、現在では10種類を数える程となった。このことは今や、乾癬診療には、豊富な治療選択肢が存在することを意味している。治療選択肢の多さは患者にとって大きな利点であることは間違い無いが、実際の診療においては、どの製剤を使用するかについて迷うことも少なくない。生物学的製剤の本質は、もともと生体内に存在する免疫グロブリンであるが、ときとして生体に備わる免疫システムから異物と見なされ、排除の対象になる場合がある。本講演では、生物学的製剤の選択において、薬剤の持つ免疫原性の観点から考察を加える。

### 【略歴】

2006年 3月 長崎大学医学部 卒業  
2011年 3月 長崎大学大学院3年次  
早期修了  
4月 米国Duke大学免疫学教室  
2014年 4月 東京大学皮膚科 助教  
2015年 3月 東京大学皮膚科 講師  
2018年 6月 日本遠隔医療学会  
皮膚科遠隔医療分科会長  
12月 東京大学皮膚科  
乾癬センター センター長  
2019年12月 東京大学マイクロ・ナノ多機能  
デバイス連携研究機構 幹事

## 薬剤の特性からみた乾癬診療 ～北海道における治療連携を考える～

本間 大

旭川医科大学 国際医療支援センター 教授

新規乾癬治療薬の開発により、既存治療に対し抵抗性を示す病変や合併症に対しても、十分な治療効果が期待できるとともに、乾癬の分子病態の理解も進んでいる。生物学的製剤はこの中心的役割を果たすが、現在までにバイオシミュラー2製剤を含む12製剤が使用可能な状況であり、それぞれ、皮疹に対し高い臨床効果が得られることが示されている。関節炎等の合併症に対する有効性、製剤の免疫原性、投与間隔、薬剤特有の有害事象など、それぞれの薬剤による特徴があり、これらを念頭に置き、薬剤選択を行う必要がある。一方、我々が皮膚科診療を行う北海道は非常に大きな面積を有し、基幹病院における専門医の偏在などにより、地域において使用可能な治療オプションに制限が生じている。この結果、同じ道内にあっても地域により、乾癬患者に対して平等な治療機会の提供が困難な状況にある。本講演では、旭川医大皮膚科関連病院が存在する北海道北部、東部地域における乾癬診療の現状を提示し、乾癬診療の進歩を地域住民に提供することを目的とした地域連携の可能性について述べたい。

### 【略歴】

1996年 旭川医科大学 卒業  
旭川医科大学病院 研修医  
2001年 旭川医科大学医学研究科 卒業  
市立稚内病院皮膚科  
2003年 英国Cancer Research UK  
(2006年2月まで)  
2008年 旭川医科大学皮膚科 講師  
2014年 旭川医科大学皮膚科 准教授  
2019年 現職  
現在に至る

